

優秀賞

夢までの道

十島村立宝島小学校 6年 舟木 蒼哉

ぼくは、小学四年生の四月に、東京からここ鹿児島県トカラ列島の宝島に山海留学してきた。東京では、夢を持っていなかった。本当に自分に何ができるのか、何がしたいのか分からなかったからだ。人との関わりも苦手だった。

宝島に到着したあの日。僕を島のたぐさんの人達が出迎えてくれた。その光景と人の温かさは、今でも忘れてはいない。

島での暮らしは、東京とは違い島民のみんなが僕を知ってくれている。東京では経験できなかったことだ。初めは、島民のほとんどの人に知られていることが、正直なところ受け入れられなかった。「ほつといてほしい。」と思うことも多かった。それでも島民の方々が声をかけ続けてくれた。

宝島で一年、また一年と過ごしていく中でたぐさんの人との関わりを持つことが苦ではなくなった。自分の考え方が変わっていくのが分かった。

いつも、食事や家庭のことをしてくださる里親さん。学校での友達や先生との関わり。島民の方が見守ってくくださる温かさなどを通して、少しずつぼくの心は温かくなり、人との関わり方を考えられるようになった。

宝島で生活するうちに、自分の中で夢が芽生えた。それは「小型船舶の免許を取り、このトカラ列島を縦断したい」という夢だ。海をヨットで旅し、宝島に寄港する人との出会いがあった。また、島民の方で小型船舶の免許を持ち、漁業をしている方もいる。宝島での自然との出会い、島の人々との出会いがあれば、夢を持つことはなかっただろう。

東京から宝島までの道が、ぼくのこれからの夢につながってきたのが、見えたとような気がする。

宝島に来て、ぼくは変わった。それは、自分の夢までの道が見えたからだ。